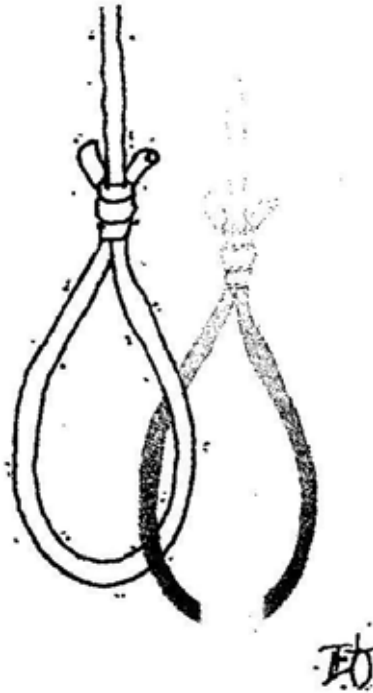


赦免状

第3編 11章

信仰によって義とされること (信仰義認)



義認とは神がイエス・キリストの義を根拠として私たちのすべての罪を赦してくださること、またキリストの義を私たちに転嫁してくださる恵みであると言えます。私たちは神の前で言い逃れることができない罪人でしたが、その神が私たちが義人として受け入れてくださったと言うのです。私たちは罪人であったために、私たちは神の敵であり、神の恵みを受けることができませんでした。そして罪のあるところには必ず神の怒りと罰が及びます。ですから神はキリストの義を私たちに転嫁されることで私たちが義と認めてくださったのです。それは神が私たちを愛してくださったからでした。義認は神の愛から私たちに与えられた赦免状と言えるのです。

死刑囚にとって最大の福音があるとすれば、それは何でしょうか。明日の朝食に肉のスープが出されると言う知らせでしょうか。明日から労働の一切が免除されると言う連絡を聞くことでしょうか。たぶん彼にとって一番の福音は「自分の罪が無条件で許された」と言う知らせではないでしょうか。それは信じられないような知らせかもしれません。しかし、その知らせを死刑囚は一番、待ち望んでいるのではないのでしょうか。それでは一体誰がそのような決定を権限を持っているのでしょうか。看守ですか。彼の両親ですか。それとも刑務所の所長でしょうか。いえ、彼らにはそれを行う力がありません。

しかし、大統領ならばそれをする力を持っています。大統領だけが囚人の赦免、減刑、そして地位を復権させる巨大な権限を持っているのです。今日の韓国では、この赦免権は行政府から司法府を経て実行されるようになっていました。そして赦免状を受け取った瞬間から罪人は義人とされ、死刑囚は自由な市民とされます。キリスト者は神から赦免状を受け取った人びとです。それは永遠の罪と永遠の刑罰から解放される永遠の赦免状なのです。

第1節 義認がなければ救いはなく、義認の教理を知らなければ正しい信仰生活はあり得ません。

慈しみに満ちた神は律法の呪いの下にある私たちに恵みを施してくださいました。それが私たちにキリストを与えてくださったと言うことです。私たちが信仰によってキリストを受け入れるとき次のような二つの恵みを受け取ることができます。第一に、罪なきキリストの義によって、私たちが神との和解に導かれることです。そのときから神は私たちの審判者ではなく、父となってくださるのです。

第二は、キリストの霊の働きによって私たちが日毎に聖い者とされることです。神の恵みによって聖い生活を少しずつ守ることができるようにされるのです。この一番目の和解の恵みを「義認」と呼び、第二の聖化の恵みを「再生」(Regeneration)と呼びます。今回は義認の問題に集中して考えようと思います。しかし、義認を取り上げながらも、救いと関連して私たちの善行がどのような意味があるかについても明らかにしようと思います。

義認と言う言葉は簡単に言えば「義と認められる」と言うことです。この言葉は罪人である人間が法的に義人と認められたことを宣言することを意味しています。つまり、刑の執行を待っていた囚人が赦免状を受け取ったという意味となる訳です。それならばなぜ私たちは義と認められる必要があるのでしょうか。そして、私たちはどのようにして義と認められていくのでしょうか。この質問は大変重要なものだと言えます。なぜならば義認の教理は私たちの信仰生活にとって最も重要な事柄を取り扱っているからです。家の扉で言えばちょうつがいのようなものです。そこで私たちの救いと敬虔は次のような二つの知識から始まります。一つは私たちと神との関係についてです。そしてもう一つは罪人に対する神の審判についての知識です。そして義認の教理はこの二つの知識を正しく理解するための土台となるのです。

それでは今度は義認が何であるかを整理してみましよう。義認とは神がイエス・キリストの義を根拠として私たちのすべての罪を赦してくださいること、またキリストの義を私たちに転嫁してくださる恵みであると言えます。私たちは神の前で言い逃れることができない罪人でしたが、その神が私たちが義人として受け入れてくださったと言うのです。私たちが罪人であったために、私たちは神の敵であり、神の恵みを受けることができませんでした。そして罪のあるところには必ず神の怒りと罰が及びます。ですから神はキリストの義を私たちに転嫁されることで私たちが義と認めteくださったのです。それは神が私たちが愛してくださいからでした。義認は神の愛から私たちに与えられた赦免状と言えるのです。

第2節 聖書の証言

今度はこれまでの説明について聖書の証言を探し出してみましよう。義認の教理を直接取り上げている聖書の箇所はいくつも存在します。まずパウロの証言です。「だれが神に選ばれた者たちを訴えるでしょう。人を義としてくださるのは神なのです。だれがわたしたちを罪に定めることができましよう。死んだ方、否、むしろ、復活させられた方であるキリスト・イエスが、神の右に座っていて、わたしたちのために執り成してくださいるのです」(ローマ8章33、34節; 参考、ローマ3章26節; ガラテヤ3章8節)。この言葉を言い換えればこうなります。「神が許してくださいた者たちを誰が再び訴えることができるだろうか。キリストが弁護して下さっている者た

ちを誰が罪に定めることができだろうか」となるでしょう。

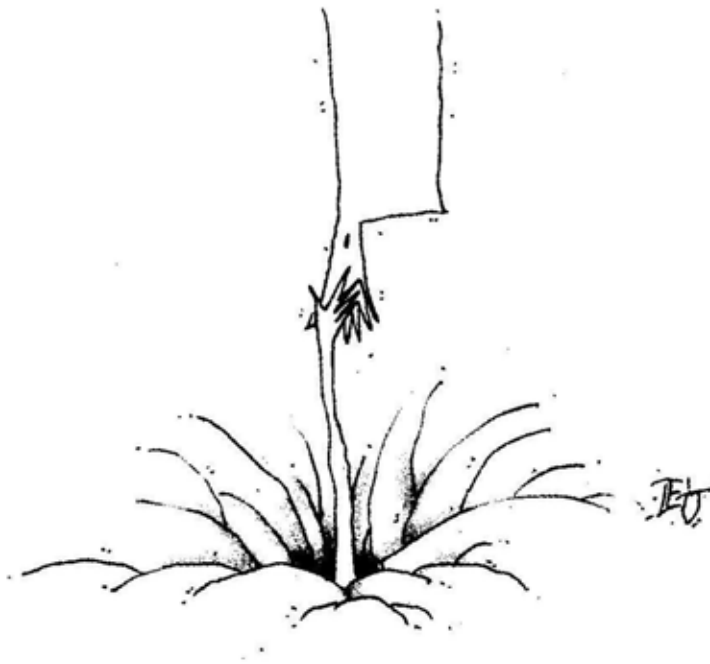
また使徒言行録のみ言葉は罪の赦しが、「義と認められること」であり、このような恵みは律法を守る行為とは全く関係がないことを証言しています。「だから、兄弟たち、知っていただきたい。この方による罪の赦しが告げ知らされ、また、あなたがたがモーセの律法では義とされえなかったのに、信じる者は皆、この方によって義とされるのです」（使徒 13 章 38、39 節；参照 ルカ 18 章 14 節）。ここでは私たちが義と認められるのはただキリストの義によると言うことが語られています。ですから、アンブロシウスが「自分の罪を告白することこそ、正しい義認である」と語ったことは非常に適切な表現と言えるのです。

またエフェソ書 1 章 5、6 節でパウロは義認を「(子として) 受け入れる」と言う言葉で説明しています。そしてローマ書 4 章で彼は最初に義認を「義と認められた (義を転嫁された)」と呼んで、罪を赦された、罪を覆い隠されたと表現しています（ローマ 4 章 6～8 節；参照 詩編 32 編 1、2 節）。また、パウロはコリント後書 5 章で神の義を得ることができたと言うことと、和解させられたことを同じ意味で使っています。「これらはすべて神から出ることであって、神は、キリストを通してわたしたちを御自分と和解させ、また、和解のために奉仕する任務をわたしたちにお授けになりました。つまり、神はキリストによって世を御自分と和解させ、人々の罪の責任を問うことなく、和解の言葉をわたしたちにゆだねられたのです。ですから、神がわたしたちを通して勧めておられるので、わたしたちはキリストの使者の務めを果たしています。キリストに代わってお願いします。神と和解させていただきなさい。罪と何のかかわりもない方を、神はわたしたちのために罪となさいました。わたしたちはその方によって神の義を得ることができたのです」（コリント後書 5 章 18～21 節）。つまり義認は和解であり、和解は罪の赦しと言えるのです。

第3節 オジアンダーは「本質的義」と言う詭弁で聖書の教えを惑わそうとしている。

オジアンダーはキリストがただ彼の神性によってだけ私たちの義となり、彼の神性によってだけ私たちに本質的な義を与えられると主張しました。キリストによって神の本質と属性が私たちの内に注入されて、私たちは義とされると言うのです。それはキリストの本質と私たちの本質が混ざり合うと言うことになる訳です。つまり、私たちは仲保者の恵みによって義とされるのではなく、また仲保者を通して神の義が私たちに単純に提供されたと言うのでもなく、神が私たちと本質的に結合されたときにだけ、私たちは神の義にあずかることができるとオジアンダーは主張するのです。彼のこのような思想は人間としてこの地上に来てくださったキリストがその従順と贖いの死によって、罪人のための義が成就したという聖書が教える明らかな真理を拒否するものと言えます。彼は高貴な義の業は人間性を超越するものであり、従って彼の功労はただ神性にのみ帰されるほかないと強調しました。彼の主張は仲保者の功労を蔑ろにする妄想に過ぎません。私たちが義とされるのはただ真の仲保者であるイエス・キリストを通して受ける神の恵みであるからです（ローマ 5 章 19 節；コリント後 5 章 21 節）。

礼拝で行われている聖礼典でも見ることができるように私たちの義と救いは二つともただ彼の肉体によって与えられるものなのです（ヨハネ 6 章 48、55 節）。それはキリストが単純に人としてのご自身の力で罪人を義とし、命を与えてくださったと言うことではありません。ご自身の内に隠されていた、人には理解されない神を、ご自身を通して啓示されたと言う意味なのです。ですからキリストは私たちに向かって常に開かれている泉と言えます。私たちが彼の泉で密かに隠



されていた聖なる恵みを見つけ出すのです。

またオジアンダーはイエスを信じた後にも依然として悪を行う者が義と認定されるという事実を批判し、承諾すること拒みます。それは神を冒瀆するもので、その方の本性に反するものだと言います。しかし、それは彼が罪の赦し（義認）と再生（聖化）を混同していることから生まれる誤解であると言えます。キリストの義によってのみ、ただ一度受けた罪の赦しは確実に、完全な

ものでなければなりません。だからこそ私たちは神の審判を無事に通過することができ、この地上でも揺るぐことのない喜びと平安を受け、何者にも妨害されることなく大胆な祈りの生活を送ることができるのです。

しかし、もちろんそうでありながらも同時に私たちは引き続き聖とならなければなりません。罪責は無くなりますが（ローマ 4 章 6、7 節）、依然として私たちは罪に汚染されているためです。パウロの葛藤と勝利の宣言はその二つをどのように調和させることができるかをよく示しています。「わたしはなんと惨めな人間なのでしょう。死に定められたこの体から、だれがわたしを救ってくれるのでしょうか」（ローマ 7 章 24 節）。オジアンダーが語る本質的な義についてパウロは悲痛な叫びをあげています。それでも彼はキリストに会って勝利の確信を抱き、勝利の宣言をしているのです。「死も、命も、天使も、支配するものも、現在のものも、未来のものも、力あるものも、高い所にいるものも、低い所にいるものも、他のどんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです」（ローマ 8 章 38、39 節；参照、8 章 33 節）。キリストによって義とされた者は、またキリストによって継続して聖とされるのです。

第 4 節 スコラ神学者は義とされるためには私たちの側の善行が必要だと主張する。

教皇主義者たちは義を信仰と行為の共同作品であると考えています。それならばパウロの数多い証言は偽りになってしまうのでしょうか。「もし、彼が行いによって義とされたのであれば、誇ってもよいが、神の前ではそれはできません。聖書には何と書いてありますか。「アブラハムは神を信じた。それが、彼の義と認められた」とあります。ところで、働く者に対する報酬は恵みではなく、当然支払われるべきものと見なされています」（ローマ 4 章 2～4 節；参照、ローマ 3 章 27 節；10 章 3 節）。もちろん彼らはいたずらな妄想を語っているだけなのです。彼らは人が義と

認められるために助けとなる行為は各自の自由意志から出るものであり、律法的な文字だけを守る行為ではなく、キリストからの賜物であり、再生の実であると語ります。しかし、どのように言葉を変えたとしても人間のすべての行為は排除されなければなりません（ガラテヤ3章11、12節；参照、ローマ10章5、9節）。人間の善行は再生した者のものだと言うことができても、それは神の前では取るに足りないものであるために義認の条件とはなり得ないのです。

また彼らは二重の偽りを語っています。つまり、信仰は神からの功労に対する保証を待つ良心の確信であると語り、また神の恵みは無償の恵みを転嫁されることではなく、聖化を追求するように助ける聖霊（つまり個人の努力+聖霊）であると言っているのです。しかし、彼らは次のようなアウグスチヌスの言葉を思い出さなければならないでしょう。「聖徒たちの義は、この世においては徳の完成よりもむしろ罪の赦しのうちに存する」。またベルナルドスの有名な言葉も助けとなるでしょう。「神の義は罪を犯さぬことにある。しかし、人の義は神の赦しである」。

パウロはローマ書で福音と律法を比較しながら私たちの義はただ信仰によって受けるものであることを語っています（ローマ10章5、6、9）。福音の約束は神の慈しみにだけ依存しており、律法の約束は行為を条件としています。しかし行為を要求する律法は私たちにはまったく益とはなりません。なぜなら聖徒たちはもちろんのこと、聖人と呼ばれる人たちの愛も不完全であり、どんなに完全そうに見える人も律法のすべてを守ることはできず、したがって人間のどのような行為もそれ自体では賞を受けることができる功労とはなりえないからです。

またパウロはほかのところでさらに明確な言葉で信仰を人間の行為から完全に切り離しています。「律法によってはだれも神の御前で義とされないことは、明らかです。なぜなら、「正しい者は信仰によって生きる」からです。律法は、信仰をよりどころとはしていません。「律法の定めを果たす者は、その定めによって生きる」のです」（ガラテヤ3章11、12節；ハバクク2章4節）。私たちはただ信仰によってだけ義とされるのですから、誇れるものは一つもありません（ローマ4章2～5節、16節）。神の義はただ福音によって現され、その義はただ「信仰」という私たちの空の手から受け取られるものなのです（ローマ1章17節、3章21、24、28節）。

ある人々はオリゲネスとほかの教父たちから借りてきた思想によっていたずらな妄想を語っています。律法の儀式的な行為は、今は必要とはされないが、道徳的行為は依然として私たちが義となるための功労となりえると言うのです。しかし、律法のある部分を守るならば、必ず他の部分も守らなければなりません。それならば私たちは依然として律法の呪いから解放されていないこととなります（ガラテヤ3章10、12節；レビ18章5節；申命27章26節）。このように律法には人を義とする力がないのです（ガラテヤ3章21、22節）。

ですから信仰の義は神との和解であり、この和解は神の無条件の罪の赦しなのです（コリ後5章19節）。人は罪の赦しを受ける前には神の敵でした（ローマ5章8～10節）。ですから罪人が神によって義と認められるのは、神の無償の恵みによるものなのです。使徒言行録の説教でパウロはモーセによっては受けることができなかつた義を今、キリストによって受けるようにされたと語っています（使徒13章38、39節）。私たちが義とされる方法はただひとつだけしかありません。それはキリストの仲裁によって、キリストの義を転嫁されることによって受け取ることができるのです（ローマ5章19節）。

結びの言葉

義人でなければ誰も神との交わりをもつことができません。そして私たちが義とされる道はキリストのほかにはないのです。それは神から赦免状を受けることです。その赦免状にはきっと「イエス・キリストが流された血潮によって罪を赦す」という文章が記録されています。あなたはこの赦免状を受け取っていますか。